

最近の学生の意識傾向

その深層構造を理解するために

学生サポートセンター相談課・教授
岡 昌之

現代の若者の「複雑系」とも言うべき、危機をはらんだ精神構造、行動パターン、コミュニケーション・パターンの深層構造を理解するために、考えるヒントを提供したい。

まず最初にいわゆる「ひきこもり」傾向について考えてみたい。関係の微妙な場面で「別に・・・」とって会話を忌避しているかのような最近の青少年の言い方は、消極的態度の典型であるように思えるが、見方を変えれば深層において自分を相手と「一緒にしてほしい」という意思表示であるようにも取れる。ニートやフリーターといわれる若者に向かって、「君は何を考えているのかね」と聞いても、かえって来る言葉は、この「別に・・・」という言葉に類する言葉であることが多い。いわば彼らは、自分を出すことに慎重であり、その心の奥では「わからない奴には教えない」というような「ゴーマン」な気持ちがあるのかもしれない。その気持ちに付き合うのは容易ではなからう。また見方を変えれば、精確に自分を理解されたいという願望があるともいえよう。そこには、ある種の感受性と知性が潜んでいるようにも思われるが、対話には根気と機転が必要となる。

彼らは、自分が誤解されるようなら接触をあきらめ、そして一人で考えることを選ぶことが多くなる。その傷つきやすさは、「やさしさ志向」になるかもしれない。しかし一人で考えて、先の先まで見えてしまうような気がしてくると、思い切って冒険ないし試行錯誤することがしにくくなる。若者の特権であるはずの「試行錯誤」を抑制してしまうと、どうしても「ひきこもり」的になりやすい。さらに「広場恐怖」的な不安が出てくることになる。その結果として率直な感情表現が苦手になる。あるいは「粗大」なコミュニケーションを嫌悪するようにもなる。それが高じて、対人的距離に敏感になり嫌悪感が相手に向かうと、「うざい」とか「きもい」というような、隠微な生理的嫌悪感に発展して、仲間作りを阻害し、「いじめ」の原因になったりする危険がある。

青少年がその自発性を生かせるようになるためには、「自分には理解者がいる」という実感が必要である。「ひきこもり」の心を外から批判しても何の効果も上がらな

い。若者一人一人が抱えている不安の性質を個別に理解して、相互のコミュニケーションの試行錯誤を有意義にすることが、若者を精神的に支援する確実な方法であろう。

次にいわゆる「切れやすい」傾向について考えてみよう。最近の若者は感じやすく、影響されやすいため、不安定になりやすい。自分の感じやすさをもてあましているのかもしれない。そのような不安定、不愉快を相手との関係に感じてしまう。このやはり隠微な感覚を、彼らは「むかつく・・・」と表現しているのかもしれない。彼らは心身が繊細なのであり、その感じやすさを相手に理解してもらいたいのだが、その希望がもてないということであろうか。仮に若者が「むかつく」と言ったとして、それに対して年配者が「何だ、それは」と違和感を表明しても関係は進展しないであろうし、反対に「その気持ちはわかるよ」と妥協したところで、関係は本物にならないであろう。「その言い方がむかつく」とか言われるかもしれない。理解されないことに我慢がならないという、このような若者の不安に感情移入するのは、容易ではない。

若者の心身の繊細さは、それが自己の中に納まりにくいと「摂食障害」のような症状になる場合がある。この障害は、いわゆる過食の時代といわれる現代において多く見られる障害であり、食糧不足の時代に育った年配者には理解の困難なものである。食料は豊富だが、物事が時間的余裕を失いやすい現代においては、一種の必然というようにも考えられる障害である。いわば彼らは、彼女らは、物事を「おいておく」ということが大の苦手である。いろいろ言われるのがいやなのであるが、どうしても気になってしまうのである。体重とか体型とかもそうである。他人は他人、自分は自分というように適度に距離をおけない。これはその人の精神的弱さでもであろうが、現代社会の余裕のなさでもであろう。

外からの評価によって自己の概念が大きく揺るがされてしまうという事態は、「健全な自己愛」の弱さという精神的問題を生む。人のことはさることながら、まずは自分の足元を見るという自明のことがらが、危うくならかねない現代社会なのである。自己の存在に自明な自信

をもてないため、「リストカット」に走る若者に対して、年配者が急ごしらの論拠で迫っても、速やかな解決にはなかなか至らないというのが現状である。若者にとっては、往年の若者の「どうにかなる」という感じが弱く、ややもすると「味方でなければ敵である」という切迫した生活実感が優勢になりやすい。いつも何かに迫られている感じは、「モラトリアム」の喪失となり、落ち着いてゆっくり考えるという良識を追放しかねない現状をもたらしているのかもしれない。

このような事態に対して大人たちは、体を整え、心を修め、自己の社会的視野を広げることによって心のゆとりを取り戻すことが必須のこととなる。「ゆとり」とは、教育をサボることではなく、教育の可能性をみずみずしい感受性によって蘇らせることなのではなかろうか。

三番目にくるのは「細やか」な傾向ということである。若者が「とりあえず・・・」というときは、「考えるといろいろあり過ぎる」というときでもある。気づかいは、疲れやすさをもたらす。現代の若者は「出たところ勝負」が苦手である。いわば準備が細かい。幼少期からいろいろお膳立てをして育てられている。焼け跡に原っぱの時代は、はるか昔のことである。「過保護」の若者を、いまさら急に放り出したところで、教育的効果はすぐには

上がらない。年配者のほうが「逆切れ」して混乱に輪をかけることになりかねない。そのあたりの見通しができるのが大人というものであろう。

冒険をしきれない若者は、「定番志向」という傾向をもつ。裏返せばこれは、潜在的な多様性への関心ということになるのかもしれない。ただしそれを強く主張しないのが最近の若者の特徴である。安定志向のマニュアル好きは、時に例外に対する不寛容をもたらす。逆転すると、「荒唐無稽」な仮想現実への関心にもなる。「精密機械」的な細やかさは、精神のナノテクノロジー的な認識能力を生み出す可能性があるが、そのためには健全な自己愛と良好な対象関係が必要である。「故障しやすい」細やかさは、最近の青少年の「発達障害」的傾向ともなり、「葛藤を避けたい」心は、ある種の消極的「平和試行」を生み出しているのかもしれない。

若者の不安と表裏をなす彼らの隠れた「能力」を感じ取りつつ関係を維持することが、対応の工夫となろう。「オタク」の心を、情報化、グローバリゼーションに対する若者の心身の防御的、適応的反応をして理解することも必要であろう。迎合せず、決め付けずの姿勢を保つての、発見学習的対話が求められるのではなかろうか。